

(講演録)

《漂流礼讃》

——「はぐれ」の視点から地域と世界の歴史を考える——

ヨース ジョエル

愛知県立大学の創立70周年記念事業として、2022年12月11日に、「足もとを見つめ、世界を想う 私たち一人ひとりの想像力と可能性」をテーマにした講演会が行われた。以下は当日の講演をもとにした論考である。

序

「漂流」とは、漂って流れることである。「漂」=ただようという言葉の響きは穏やかで実際に漂うようになったとしても、それほど気にならない。一方、流れて、とくに流されてしまうのは困ると感じる人は多いと思われる。しかし、ここでは、漂流という語に含まれる積極的な側面に触れ、住み慣れた環境から放り出されることが必ずしも被害と苦痛だけで終わる災難ではない、と論じたい。たどり着いた地域の人々に漂流者が新たな視点を提供する——そのようすばらしい出会いとなりうる。漂流者が地域と世界の歴史に顕著な痕跡をのこした例をいくつか紹介することで、読者の思考を刺激したい。

移民、異人……

私は30年以上前に日本の地方都市に流れ着き、15年前に高知という本州の大都会から遠く離れた土地で職を得た、ベルギー出身のものである。もしもベルギー出身の若者が1990年代ではなく、19世紀に日本にたどり着いたなら、どうなったのだろうか。「異人」が数少ない居留地以外の「内地」を行き来しある程度自由に定住することができるようになったのは、1899年、明治32年のことである。明治初期の明六社などでも「内地雑居」「内地旅行」は議論さ

れたが、実現したのは20世紀の前夜である¹⁾。朝鮮半島はさておいて、外国にルーツを持つ人々が十万人、百万人単位で、日本の津々浦々に住みつくようになったのは、第二次世界大戦が終わって何十年も経ってからのことである²⁾。また、ここ10年は、観光客が千万単位で日本を訪れるようになった³⁾。在日外国人を取り巻く状況が大きく変化している昨今だが、すべてが変わったと言えるだろうか。150年前の「異人」に向けられたまなざしが、今の「移民」に向けられている、とするのは思い込みだろうか。「移民」という言葉の響きには不穏なニュアンスが付きまとう、と感じるのはわたしだけだろうか。

私は高知県立大学で教えているのだが、学年最初の授業で「移民である」と切り出すことがある。勝手ではあるが、用が済めばすぐに帰国してもらえる「お雇い」ではない、と信じたい。日本文化論や日本思想史などを担当していることと、その一方、移民であること——この二つの現実を違和感なく考えあわせてくれる大学生、あるいは日本人はまだまだ少ない。

外から日本にたどり着いた人々への認識は、学術的関心事にとどまらない問題をはらんでいる。移民政策は、人口減少など日本の社会が直面している課題と密接に繋がっている。日本政府が移民（あるいは難民）を受け入れる政策に堂々と踏み切らないようだが、大学生という将来のインテリ層はその理由について考える必要がある。「移民である」という自己紹介にはそのような思いが込められている。

ただし、ここで論じたいのは、移民政策ではなく、移ろう人々である。移民よりも、異人ならぬ「移人」かな。そのために、現代社会を少し離れたところからとらえてみたい。

足元と漂流——象徴

今日の講演会のテーマである「足元を見つめて」と漂流は、ベクトルがかなり異なる。トム・ルッツの『無目的——行き当たりばったりの思想』では、「漂流」はあらかじめ想定する目的あるいは結果に縛られない思考プロセスの喩えとして使用されているし、称賛されている⁴⁾。ここでも、「漂流」という概念を広く定義して、その「象徴性」についてポジティブに考えていきたい。

足元。多くの人にとって、仕事場や学校や家庭、一定のリズムにあわせて営まれる生活の場である地域が、かけがえのない足元である。地域の大切さを否定する必要はない。だが、陸地にしっかりと足をつけて、まさに「地に足の着いた」生活を重んじる質実剛健、そしてその前提となる、定着／安置といった足元に、もう一つの視点を加えてみる価値はあろう。それは、象徴としての「漂流」である。

足をすくわれて流された人、あるいは自分から安全な陸地を離れて、未知なる流れに身を任せて遙かなる地平線の彼方へ足を運んだ人たちは、確かに「はぐれ者」だが、「みじめな根無し草でしかない」とは限らない。肝心の視点は二つある。まず、漂流は意外性に満ちた、想定外の動きである——単なる旅ではない、という視点。そして、もう一つは、未知の地を踏んでからの活躍へのまなざしである。たどり着いた国や地域の社会の在り方に大なり小なり注目すべき影響を与えた事例について考えてみよう。

漂流

漂流について大変まじめな研究を行い発表する学会がある。なづけて、「漂着物学会」(英語: Japan Driftological Society)である。学会誌もあるが、会報の名は、「どんぶらこ」。遊び心たっぷりの誌名だが、研究は、いたってまじめに行われている模様である。例えば、2022年の第19巻6月号では、林重雄氏が「愛知県田原市に発芽したニッパヤシの果実の漂着について」詳細に紹介している⁵⁾。

同じ雑誌で取り上げられる事柄には、ヤシの実どころか、もっと生々しいものがある。浜に上がった死体がどこから流れ着いたかの検証、あるいは、東日本大震災の漂着物が沖縄の久米島で見つかりそのメカニズムの解明など、である。黒潮に洗われる西日本の太平洋側は、漂着物の宝庫である。柳田國男もかつて提唱したように、海流は日本に多くをもたらしている。ただし、忘れてはならない。その一方、海岸の人々から多くを奪ってもある。しかも、歴史的に見て、海での漂流はかなり高い確率で死を意味する。

このような漂流の実態を見ながらもあえてポジティブな側面を持ち出すとい

うのは、実に冷酷な視点である。それでもなお建設的な一面があると論じた。ここで「礼賛」したいのは、漂流という言葉に潜む、安定した環境を後にせざるをえなかった人がたどり着いた土地で気落ちすることなく「前向きに生きてみよう」という、知的好奇心と社会性の発露である。

礼賛——谷崎潤一郎

「漂流礼讃」は、谷崎潤一郎が1933年に世に問うた「陰影礼讃」という評論の題目をもじったタイトルである。谷崎自身も、関東大震災後、関西に移住して、ある意味でささやかな漂流を経験した。源氏物語の現代語訳など、関西への移住は彼の作品に日本の伝統的な美と向き合い新しい味を加えたといえる⁶⁾。

礼賛——ブルーノ・タウト、ラフカディオ・ハーン

ブルーノ・タウト（1880-1938）は、谷崎とほぼ同時代に活躍したドイツの建築家である。ナチス政権が成立するや否や、ユダヤ人はもちろんナチスの政策に批判的な人々も厳しい弾圧をうける。ユダヤ人であり労働者集合住宅の設計で名声を得るなど社会主義にも傾倒したタウトは、身の危険を感じ『陰影礼讃』が上梓された1933年に否応なくドイツを去り日本に向かう。日本で満足のゆく仕事を得られず3年ほど経つとトルコへ移ってしまうが、ここで注目すべきは、タウトが日本にいる間に、日本の伝統的な建築に魅了されその再評価に大きく貢献したことである。

京都の桂離宮が日本建築の真髄であるという認識は今日でも日本でひろく共有されているが、モダンな建築様式が普及する昭和前期に桂離宮の伝統美を絶賛しその再評価ブームに火をつけたのは、ほかなく、タウトの著作『日本美の再発見』である。まさに、タウトの漂流の賜物とも言える⁷⁾。ここで重要なのは、彼の判断の当否ではなく、はぐれ者のタウトの視点が日本の社会に及ぼした影響である。

一般論的に言えば、自分の文化や社会の姿を新鮮な角度から見て理解するには、他者の視線が大変貴重である。意識もされない、言葉にもなっていない

掟や仕来りは、異邦人あるいは訪問者の観察や問いかけによって、新たに意識化され、言語化され、可視化される。

幕末明治の異人たちが日本をどう思ったかを独自の視点から紹介する、渡辺京二の『逝きし世の面影』には、当時の西洋人が日本人のほほえみをなんとも輝かしくて神秘的なものと感じる一方、当時の日本人にはそのような認識はなかったとあるが、よい例と言える⁸⁾。

あるいは、小泉八雲の貢献を考えてみよう。ラフカディオ・ハーンは、ニューオーリンズの新聞の特派員という本来の計画をあきらめて日本の文化と社会と本格的に向き合おうとすることで、つまり漂流者たらんとしてはじめて日本の歴史に名を遺すことが出来るようになったとも言える。実は、小泉八雲となったハーンの生涯をみていると、彼のたどってきた人生そのものが絵に描いたような漂流物語である。そして、「日本美と霊性の発見者」ハーンの日本文化に対するまなざしが日本人にどのように受け止められたかは、松江市にある小泉八雲記念館に行けばわかる⁹⁾。

礼賛——ウィリアム・アダムス

さらに遡ってみると、南蛮貿易の時代にも、南蛮＝異人たちが日本の地に漂着してから大いに活躍する例がある。そのなかでももっとも有名なものは、おそらく、三浦按針こと William Adams だろう。イギリス人のアダムスだが、船はオランダ籍。5隻の船で出発して、まずは南米をめざす。5隻のうち4隻が途中で引き返したり当時オランダと戦争状態にあったスペインとポルトガルの船のために捉えられたりして、結局1隻だけが旅を続け日本をめざす。この一隻、De Liefde ——「愛情号」——が南米の最南端をまわって太平洋を横断してから、豊後（大分県）の黒島に漂着する。徳川家康に才能を見込まれた後の活躍はよく知られている¹⁰⁾。ただし、巨視的にみれば、アダムスのもっとも重要な貢献は、「日が沈まない」スペイン帝国およびポルトガル王国による南蛮貿易の独占に終止符を打ったことである。一隻の船の漂流が、江戸時代を通じて日本と交流しつづけた唯一の西洋国オランダの台頭に道を開いたわけである。

この大きな転換は——あらゆる歴史のように——運と必然とが相俟って起きたとも言える。リーフデ号が漂着したのは1600年の4月、関ヶ原の戦いの半年前である。時代そのものが激しく動く歴史の節目であり、アダムスだけが動かしただけではない。徳川家康に気に入られたのはよいが、アダムスの漂着のタイミングがとにかく抜群だった。そのタイミングの良さは、実は、もう一つの漂流と関係している。アダムスが漂着する4年前の、いわゆる、サン・フェリーペ号漂流事件である。

日本で南蛮貿易と呼ばれる貿易は、単なる「日欧貿易」ではなく、まさしく、世界貿易の一環として行われていた。16世紀末当時は、スペイン領フィリピンのマニラと、中米のメキシコとを結ぶ航路がすでに開拓され、海流（黒潮！）と偏西風を利用してスペインのガレオン船が頻りに太平洋を横断していた。サン・フェリーペ号というガレオン船は、台風に見舞われ1596年の10月に土佐国浦戸（現在の高知市の海岸部、竜馬像からほど近い場所）に漂着して岩礁にのりあげてしまう。天下は豊臣秀吉、土佐の国は秀吉の臣下長曾我部元親が制している。漂着した船の貨物と乗組員たちをどのように処理すればよいかなど、長曾我部は秀吉の指示を仰ぐ。詳しいいきさつは他書に譲るが、交渉が長引く中、スペイン人が痺れを切らしてスペイン国王の力を誇示して、その一言が深刻な事態を招く¹¹⁾。いわゆる二十六人聖人殉教（1597年2月）である。この事件が端緒となって、キリシタンに対する不信が深まり、その後の本格的な弾圧（ひいては鎖国政策）へとつながる。カトリック教勢力と戦争状態にあるイギリスで生まれ、フェリーペ王の支配を退こうとするオランダ（厳密に言えば、ネーデルランデン）の船に乗ったプロテスタントであるウィリアム・アダムスが日本に漂着するのは、このサン・フェリーペ号事件の4年後、また秀吉の死去の2年後である。絶妙なタイミングであった。

上述したように、日本を離れてしまう漂流の例も多い。鎖国が続く江戸時代に、日本人が黒潮に流されて遠い外国に辿り着いてから大変な苦勞をして日本に戻る事件の記録もいくつか残されている。

礼賛——中浜万次郎

1838年に富山の北前船が漂流しハワイやロシアでの滞在を経て5年後に日本に戻る、いわゆる長者丸事件もあるが¹²⁾、その50年以上前の大黒屋光太夫のロシア漂流がよく知られている¹³⁾。1793年に、光太夫の10数年後、はじめて世界一周を遂げた日本人とされる津太夫も漂流を経験している。実は、彼をのせて日本に帰そうとした船は、最初の世界一周を果たしたロシア船でもある¹⁴⁾。もちろん、記録が残った「江戸時代のロビンソン」たちは、ほかにも複数いる¹⁵⁾。

日本人ではじめて「世界二周」を遂げたとされる人物について紹介したい。中浜万次郎（〈ジョン・万次郎〉は20世紀の小説で使われ定着してしまった呼び名）である。彼が歴史に大きな痕跡を残すことができた理由は二つある。その一つは、時機である。つまり、ペリーの黒船が来航する数年前に日本に戻ったので、ペリーの第二の来航（1854年1月）に立ち会うことができた¹⁶⁾。度重なる訊問の末、故郷に戻されロシアの思い出に耽りながら最期を遂げた津太夫とは対照的である。第二の理由は、彼自身の才能と才能を咲かせようとする不屈の精神である。彼の活躍は、土佐の故郷に戻ることで終わったのではなく、むしろ、そこから面白くなる。

万次郎が日本に戻るとき、沖縄本島最南端の糸満で上陸し、牧志朝忠（まきしちょうしゅう）という琉球の役人の訊問を受ける。牧志も中国に渡ったり那覇で秘密のうちに活動している英国の神父さんと関わったりして非常に興味深い人物であるが、面白いことに、万次郎と英語でやり取りをしたそうである。万次郎は島津斉彬という開明派の藩主がいる薩摩国で2年を過ごしてから、ようやく故郷の土佐に戻ることを許されるが、ここでも取り調べを受ける。役人の名は、河田小龍である。本業は絵師。14歳の時に土佐の西のはずれの小さな漁村から漂流してアメリカで英語の読み書きを覚えてきた万次郎が、日本語の読み書きを教わるのはこの河田である。また、万次郎の話に真剣に耳を傾ける河田自身は、その体験談をまとめ『漂異紀畧』（1852年）として刊行する¹⁷⁾。万次郎に世間の目が向けられるきっかけとなる。日本に戻ってから3年経った時点（1854年）に、万次郎の漂流をテーマにした漂流記がすでに25本

出された。歌舞伎の演目の題材にも使われるぐらいの人気ぶりである¹⁸⁾。

ここから万次郎の本格的な活躍が始まる。通訳や英語の教授はもちろん、咸臨丸への同乗、英語の会話本の作成（『英米対話捷徑』1859年）、捕鯨術の伝授、航海書の翻訳等々。これらすべては、しかし、中浜が漂流してからアメリカで身に付けた知識と経験を、今度は帰国後に生かすという、二重の努力のたまものである。まさに、ポジティブな漂流の模範と言える。

小説家にとって、漂流というのは実に面白くて可能性に富んだテーマである。「ジョン・万次郎」に再び脚光を浴びせたのが1938年の井伏鱒二の小説であることは、必ずしも驚くべきことではない。もう少し近い例として、池澤夏樹をあげてみたい。池澤の長年の海外生活も一種の「漂流癖」の証しとも言えるが、彼の小説のなかで「漂流」に触れるものが少なくない。

礼賛——池澤夏樹

1984年に『海』という雑誌に発表された小説「夏の朝の成層圏」では、漂流が大きなテーマである。嵐のなかで甲板へ上がって写真を撮ろうとする主人公が波にさらわれるという設定になっている。安全ロープを使わないのでひょっとして意図的な漂流であったとほめめかしたり、日本に戻るチャンスが訪れても太平洋の島に残ると決めたりして、小説は漂流を「プラス」と「マイナス」とが混在する体験として描いている¹⁹⁾。

1987年の『スティル・ライフ』でも、会社のお金を横領して逃亡を続ける佐々井という人物を漂流者と見てよいのではないかと思う。同じ中公文庫に収められている『ヤー・チャイカ』に登場するロシア人パーヴェル・イワノヴィッチ・クーキンも、漂流者と言える。余談だが、同じクーキンは、18世紀末のイルクーツクに日本語の学校があったと語る場面があるが、これは上で触れた、大黒屋光太夫や津太夫の仲間たちがロシアに残ってつくった学校である。

一定の条件さえそろえば、漂流はとてもポジティブなインパクトを与える可能性をはらんだ体験である。それは無名人の場合でもそうである。国を動か

すというきわめて大きなインパクトもあれば、地域社会をよくするという小規模なインパクトもある。

礼賛——ベアーテ・シロタ

2012年の12月に他界したベアーテ・シロタの日本国への貢献は絶大である。そして、それはやはり「漂流」の産物である。日本国憲法に「男女同権」の条項が盛り込まれたのは、戦争直後のベアーテ・シロタの役割が極めて大きい。彼女は、ウクライナの音楽家レオ・シロタの娘である。ウィーンなどで活躍していたレオは、1928年に日本で働く機会を得る。欧州でユダヤ人迫害が深刻化すると、日本に定住することに踏み切り、十数年の間日本で過ごすことになる。彼は彼で日本の音楽界に大きな影響を及ぼす漂流者であるが、第二次世界大戦が勃発するまで日本や米国などを行き来する娘のベアーテの歴史的インパクトは一段と大きい。1946年、憲法草案が練られていくなかで、女性の社会的地位の向上や参政権などをつよく主張し条項に盛り込ませるのに成功した彼女の活躍こそ、日本人の日常に計り知れない恩恵をもたらしたと言っても過言ではない²⁰⁾。

念のために付け加えたい。確かに、日本国憲法は占領軍が見守る（見張る？）なかで成立したのだが、その土台となったのは、欧米の理想だけではない。例えば、1881年に植木枝盛が創案した「東洋大日本国国憲案」が大いに参考にされた憲法案である。明治初期の国憲案と戦後の憲法草案という二つの歴史の糸をつないだのは、愛知大学でも教授を務めた鈴木安蔵である²¹⁾。このつながりを念頭に置く必要がある。ただし、やはり、女性の参政権などを強く主張したベアーテの歴史的役割は大きい。

礼賛——ぼぼちゃん

一国の行方を左右するような活動をした人だけが「よき漂流者」ではない。小さな町や貧しい地域で弱い立場にある人々のためになる貢献、その人々の心に長く響く貢献——そのような目立たない活躍も称賛されるべきではないか。

高知県に照準を合わせたい。高知は、外国人が少ない²²⁾。愛知とは対照的で

ある²³⁾。ベルギー人は1人。それでも、自分がベルギー人であると自己紹介すると、ぼぼちゃん＝サビエ・デルポルトの話が出てくるのが少なくない。デルポルトは戦前のベルギーのごく普通の家庭に生まれた²⁴⁾。当時、貧しくて敬虔なカトリック教徒が多いベルギー北部では、子どもの多い家庭が一般的だった。よく勉強できる子でも、大学で学んだり外国に行ったりすることは困難だった。そのなか、神父になることは少年を多くひきつける選択肢であり、親にとっても名誉なことであった。大学で神学を学ばなければいけないが、カトリック教会が費用を出してくれる。デルポルトも神父になり、海外で布教活動をする宣教師になると決断する。戦後、「無原罪マリアのオブレート会」に入り、遠い外国に渡る道が開く。この会は、貧しい人の救済をミッションとし、世界各地で活動を展開しているが、デルポルトは、日本に行くことにする。四国より少し広いぐらいのベルギーを出たことがない青年が、大きな船に乗って、まずインドに向かう。独立してすぐのインドの貧困は凄まじかった。カルカッタでマザーテレサにも会う。インドの社会と同じようにインドの教会組織も植民地時代のなごりが色濃く、現地の人に対等に接する姿勢がまだ根付いていなかった。デルポルトは、この状況に疑問を抱きつつ、インドを後にして日本への旅をつづける。

日本にこだわった理由は、上でも触れた日本国憲法に関係する。生涯を通じて綴った日誌にはっきりとした記述があるように、平和憲法への感心である。戦争放棄は、彼の若い心に強烈に響く理想であり、その理想が憲法に明記された国でぜひ活動したい、というのが大きな動機となっていた。当時の日本は、占領が終わり独立を回復して間もないころである。戦前、フランスなど様々な国の神父たちが布教活動に力を入れ各地で教会を建てたり学校を開いたりしていたが、戦後はアメリカ勢が強くなり、オブレート会もアメリカ出身の神父さんたちの影響力が目立っていた。ベルギー出身のデルポルトは東京での日本語研修をへて、東京から遠く離れた高知県の東部にある教区に移る。貧困や差別（もちろん日本人同士の差別）など、地域が抱える切実な課題に素直に向き合おうとするが、ここでも、新たに疑問を抱くようになる。カトリック教会はヒエラルキーの強い組織であり神父たちはかならずローマの指示に従わなければなら

ない。けれども、ローマの指示は、高知の現実とかけ離れていることが少なくない。30歳も近いデルポルトは、悩んだ末、地元の中学校に入学し、漢字の勉強はもちろん、ほかの科目も、日本の少年少女たちと机を並べて、同じく3年かけて勉強することにする。聖書の本質である「普遍愛」のメッセージを日本人に伝え根付かせるには、日本の人々の言葉と感性を大事にし、かみ砕いて広めるほかに道がないと確信したのである。同時に、田舎の人々の日頃の生活を目の当たりにして、もう一つの気づきが彼の中で生まれる——差別などもあるが、相手を思いやり、相手のために自らの利害を顧みない生活態度なら、宣教師は日本の田舎の人々に何一つ教えることはないんじゃないか、と。貧しい子どもへの生活や教育の支援、社会人のための夜間学校など、高知で地道な活動をつづける。日本の子どもはデルポルトを発音するのが難しく、「ぼぼちゃん」と呼んでいた。そして、いつの間にかそれが彼の愛称となる。ぼぼちゃんは、教会が用意する近寄りたが司祭館にいるより、普通の人と同じようなお家に住むのが良いと言って、神父さんとしての活動をつづけながらも、煤と煙を吐く汽車が一日に何度もすぐ目の前を通る小さな家に移る。そして、市内の大きな西洋式の教会と対照的な和風様式の教会を建立する。1977年に日本の国籍を取得し、日本人名を「土佐義和」にする。土佐は高知の土佐、義和は、正義の義に、平和の和。わたし自身が高知で受けている好意は、30年以上地域社会のために尽くした、この漂流者の献身的な活動とその記憶に通じると思えてならない。

移民と漂流

最後に、二つの視点を合わせて、あらためて読者の想像力によびかけたい。あらゆる移民は漂流者ではないし、あらゆる漂流者も移民として位置づけることは難しい。しかし、ますます深まっていくグローバル化は、日本だけでなく、世界各国の人々に、「よそから流れ着いたものにどのように接するか」という難題をつきつけている。あるいは、逆に、このますます流動的になっている世界は、自分たち、自分の子どもたちがいつか、自分の意志で、あるいは何らかのきっかけで、安心安全の陸地を離れ、流れに身を任せてどこかに漂着す

る可能性も決して低くない。そのとき、考えなければいけない。自分の子どもなら、流れ着いた土地でどのような対応を受ければ嬉しいのだろうか。

歴史という大河の本流から離れてしまったものたちは、本流から離れたがために、むしろ貴重な貢献をすることができたわけである。近代以前の漂流の実態はとくに厳しかったが、近代以降の社会的漂流、象徴としての漂流も、なかなかきびしい。交流よりも、拘留が待っている場合が少なくない。タウトも、シロタも、外国での迫害を逃れて日本に来た。21世紀の日本の懐は、同じように、深いのだろうか。

象徴としての漂流は、礼賛どころか、むしろ、奨励したいと思う。ITのたとえを借りて表現すれば、“アルゴリズムを狂わせてみてはどうか”である。つまり、今までの行動をもとにして様々な予想を立てて、情報を集めたり提供したりする、SNSや検索サイトなどの心臓部ともいえるアルゴリズム（算法）のその予想を裏切ってみてはどうか。書店で、普段手に取らない本を手にして、あまり知らない国の歴史について少し勉強して、日本から遠く離れたところの言語を片言だけでも学んで、服装や音楽や映画の趣味が大きく異なる人とおしゃべりをして、食べたことがない料理を試して、普段行くことがない場所やお店にぶらりと寄ってみて……これらのような小さな漂流に挑戦してみよう。また、その一方、自分の近くに現れた「異人」たちをジェンダーや国籍やその他の固定観念の監獄に拘留せずに、好奇心と好意に満ちた心で交流してみよう。

あらゆる分野で、自分あるいは他人の漂流と積極的に向き合い、多様で複雑な世界のいろいろな音に耳を傾けることで、足元をより豊かなものにすることができるのではないか。

注

- 1) 大久保利謙『明六社』（講談社学術文庫）（講談社、2007年）
- 2) 令和4年に、在日外国人の数が300万人を超えた。https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00033.html（法務省・出入国在留管理庁 2023年10月28日閲覧）
- 3) https://www.mlit.go.jp/kankochou/siryoutoukei/in_out.html（国土交通省・観光庁 2023年10月28日閲覧）

- 4) T. ルッツ、『無目的：行き当たりばつたりの思想』（2023年、青土社）
- 5) https://doi.org/10.57279/driftological.19.0_9
- 6) ちゃんとした書店なら、新潮文庫、中公文庫、角川ソフィア文庫などが配架してあるだろう。青空文庫もある：https://www.aozora.gr.jp/cards/001383/files/56642_59575.html。英訳もある：E. Seidensticker, “In Praise of Shadows” (Charles E. Tuttle, 2008)
- 7) 篠田英雄訳『日本美の再発見』（2019年、岩波書店）。最近のタウト論は、長谷川章『桂離宮のブルーノ・タウト』（2022年、工作舎）や北村昌史『ブルーノ・タウト「色彩建築」の達人』（2023年、ミネルヴァ書房）などがある。
- 8) 渡辺京二『逝きし世の面影』（2005年、平凡社）
- 9) 小泉八雲記念館：<https://www.hearn-museum-matsue.jp>；池田雅之『小泉八雲 日本美と霊性の発見者』（2021年、角川ソフィア文庫）
- 10) ここ数年の研究では、鈴木かほる『徳川家康のスペイン外交 向井将監と三浦按針』（2010年、新人物往来社）と、ベルギー出身の著者F. クレインスによる『ウィリアム・アダムス 家康に愛された男・三浦按針』（2021年、ちくま新書）が注目されている。
- 11) 漂着した土佐国浦戸の視点を盛り込んだ書として、サン・フェリーペ号浦戸漂着四〇〇年実行委員会編『運命の船 サン・フェリーペ号』（1998年、南の風社）を薦めたい。
- 12) 富山市郷土博物館の企画展など、様々な史料が存在する。<https://www.city.toyama.toyama.jp/etc/muse/kikakuhaku/list/h23/choja/23choja.html>（2023年11月1日閲覧）そのほかは、津田文平『漂流民次郎吉——太平洋を越えた北前船の男たち』（2010年、福村出版）
- 13) 史料及び研究が豊富にある。三重県鈴鹿市に記念館も。<http://suzuka-bunka.jp/kodayu/>（2023年11月1日閲覧）
- 14) 吉村昭『漂流記の魅力』（2003年、新潮新書）が詳しい。
- 15) 岩尾龍太郎『江戸時代のロビンソン』（2006年、弦書房）
- 16) ここでは、万次郎の地元の高知で刊行されている『土佐史談』第257号（「中浜万次郎」特集号 [2014年]）を参照されたい。
- 17) 数年前に出された現代語訳もある：河田小龍著、谷村鯛夢訳『漂流紀畧 全現代語訳』（2018年、講談社学術文庫）。
- 18) 幅泰治「歌舞伎になった万次郎」、『土佐史談』257号、281頁。
- 19) 単行本は、池澤夏樹『夏の朝の成層圏』（1990年、中公新書）。
- 20) 一連の流れについては、ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』の記述が面白い。
- 21) 金子勝「鈴木安蔵先生の思想と学問」『法と民主主義』1984年、第187号、14-22頁。
- 22) ここ数年は、4500人程度である。県の人口の約0.65%に留まっている。https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/140201/files/2023012500120/file_2023126414817_1.pdf（2023年11月3日閲覧）
- 23) 愛知県には、28万6千人以上の外国人が住み、県の総人口の3%以上である。<https://>

www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-2022-12.html (2023年11月3日閲覧)

- 24) ぽぼちゃんの本名は、Xavier Delporte (1928年生-2011年没)。彼の生涯については、出版されていない日誌を読んで情報を得た。ほかにも資料があると思われるが、ネットですぐ確認できるものとして、1968年のオペレート会による報告書が興味深い。当時の会の状況が垣間見え、デルポルトの名前も散見される。https://usercontent.one/wp/www.omi-japankorea.net/wp-content/uploads/2018/05/newsletters_1968.pdf (2023年11月3日閲覧)